



Data

監督・脚本・製作: マイケル・ムーア

出演: マイケル・ムーア
ドナルド・トランプ

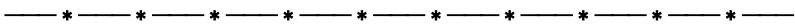
👁️👁️ みどころ

04年の『華氏911』から14年後の本作における「119」の数字はナニ？それは、2016年11月8日の大統領選挙でヒラリー・クリントンを破ったトランプ大統領の勝利宣言の日だ。それから2年後の2018年11月6日の“中間選挙”に向けたマイケル・ムーア監督流の“突撃取材”によって、本作が公開！

投票結果は、上院は共和党、下院は民主党で“ねじれ議会の誕生”と出たが、トランプはあくまで強気。さあ、今後の政権運営は？そして、米中・米露を軸とする世界への影響は？

ハッキリ言って、本作にみる①ミシガン州フリントの水道水汚染問題、②ウエストヴァージニア州の教員ストライキ、③フロリダ州パークランドの高校銃乱射事件は、そんな興味の対象外。他方、トランプはダメ！ばかりでなく、ヒラリー批判、オバマ批判を含む民主党もダメ！のメッセージは興味深い。

本作の結論は“今必要なのは行動だ。”すると、2年後の2020年11月の大統領選挙には遂にムーア自身が出馬？そんなことも射程距離に入れながら本作を鑑賞し、同盟国としての日本のあり方の模索はもとより、ロシアとのINF（中距離核戦力）全廃条約の破棄問題や米朝首脳会談の行方等も、しっかりフォローしたい。そして、2020年11月の大統領選挙では誰と誰が激突？



■□ ■ 『華氏911』に続いて『華氏119』が！この数字は？ ■□ ■

1954年生まれのマイケル・ムーア監督を私がはじめて知ったのは、『華氏911』(04年)、『シネマ6』124頁)を観た時。今から14年前だが、その問題提起の凄さにビックリ！同作が第57回カンヌ国際映画祭でパルムドールを受賞したため、ブッシュ大統領とマイケル・ムーア監督の対決がヒートアップした上、全米を“華氏911論争”に巻き込んだ。同映画祭では是枝裕和監督の『誰も知らない(Nobody knows)』(04年)、『シネマ6』161頁)が大評判を呼び、柳楽優弥くんが主演男優賞を獲得したため、日本では同作ばかりが人気となり、『華氏911』は残念ながら大ヒットとはならなかった。また、『華氏911』公開後の2004年11月2日に実施されたアメリカ大統領選挙では、共和党で現職のブッシュが民主党のジョン・ケリー候補を破って再選を果たした。

『華氏911』の「911」の数字はもちろん、2001年9月11日に発生した世界同時多発テロのこと。同作におけるマイケル・ムーア監督の主張は、2001年1月に大統領に就任したブッシュ大統領の、イラクにおける大量破壊兵器の存在その他についての主張はすべてインチキで、要するに「ブッシュ大統領はウソつき！」ということだった。

しかして、2018年11月2日から日本で公開された『華氏119』と題された本作のテーマは？その「119」の数字の意味は？

■□■2016年11月9日はトランプの勝利宣言の日！■□■

2015年8月の内視鏡検査で大腸ガン(正確には直腸ガン)が発見された私は、すぐに入院手続きをとり、9月に約20日間の入院でその手術をした。それから、約1年後の2016年10月、今度は胃の内視鏡検査で胃ガンが発見されたため、2016年11月5日から入院し、11月7日には胃の3分の2を切除する手術を受けた。しかし、早期の胃ガンは切除すればおしまいだから、1週間後の11月14日には退院し、翌日からすぐに仕事に復帰した。

その入院期間は約1週間。そして、病室内ではもっぱらTVを観る日々だったが、そこでは2016年11月8日に投開票されたアメリカ大統領選挙のニュースばかり観ることになった。今回の大統領選挙では、民主党のヒラリー・クリントン候補が共和党のドナルド・トランプ候補に勝利しアメリカ初の女性大統領が誕生する。入院前からほとんどのマスコミはそう報じていたが、夜中になってもまだ結果が判明しない激戦となった選挙区は、翌日になると、何と・・・。

『華氏119』の「119」の数字は、その大統領選挙で勝利したトランプが勝利宣言をした2016年11月9日のことだ。たまたま、その前後に胃ガン手術のため入院していた私は、連日のTV放送を観続けていたから、日本の多くの大手マスコミ報道やいわゆる“識者たち”のいい加減さ、嘘っぱちさを骨身にしみて知ることとなった。逆に、その逆境の中でトランプ大統領の勝利がありうると言い続けたジャーナリスト木村太郎氏の取材力の確かさに感服！

■□■2018年11月6日は中間選挙の日！■□■

民主党のオバマ大統領に代わって第45代アメリカ合衆国大統領に就任した共和党のトランプ大統領が、2017年1月20日に行った大統領就任演説は、“アメリカ第一主義”を前面に押し出したもので、「貿易、税金、移民、外交についてのすべての決定は、アメリカの労働者と家族の利益のために下されます。」と断言した。また、そこでは①アメリカ製の製品を買い②アメリカ人を雇うという“2つの単純なルール”に従うことが明確にされた。つまり、その内容は1861年3月4日にリンカーン大統領が行った大統領就任演説や、1961年1月20日にジョン・F・ケネディ大統領が行った大統領就任演説ほど格調高いものではないが、選挙期間中に米国民に訴えた数々の公約の実現を目指す内容だったから、ある意味で誠実なものだった。しかし、日本を含めた同盟国はもとより、アメリカと対抗するロシア、中国、さらにはアメリカと敵対する北朝鮮、シリアなどの国々は、「トランプはホントに公約を政策に移すの？」とタカをくくっていた節もあったらしい。しかし、現実はどうだろうか？

2016年11月の大統領選挙から2年後の2018年11月6日、アメリカは“中間選挙”の日を迎えた。これは2年ごとに実施する米連邦議会選挙のうち、4年ごとの大統領選挙の中間の年に実施する選挙。任期2年の下院は全435議席、任期が6年の上院は全100議席のうち3分の1（今回は35）が改選の対象となる。全米で州知事や市長、州裁判官などの選挙も同時に実施される。投票日は大統領選と同じく、11月の第1月曜日の次の火曜日と決まっている。この中間選挙は、現職大統領の仕事ぶりを評価する信任投票の意味合いを持つ、と言われている。

私は2年前の胃ガン手術で入院していた時と同じような興味でその投開票を報じるTVに釘づけとなったが、その結果は？

■□■上院は共和党、下院は民主党！ねじれ議会の今後は？■□■

即日開票の結果、上院は共和党、下院は民主党が過半数を占め、“ねじれ議会”になることが明白になった。上院ではトランプ大統領が強力にテコ入れをした選挙区での共和党候補の健闘が目立ち、下院では民主党から大量に立候補した若手女性やヒスパニック系のマイノリティの健闘が目立っている。

他方、知事選挙では民主党が7つを奪回して16から23に、共和党は33から26に減った。これを見れば民主党の勝利と思われるが、さあ、その分析は？

新聞各紙は一斉に“ねじれ議会”がトランプ政権の足かせになると報じ、さらに「法案 上下院不一致なら廃案」「民主、露疑惑追及へ 下院の権限フル活用」「国境の壁 予算は困難」「対露政策は超党派支持」「対日圧力 強まる恐れ」等々と報じた。ところが、トランプ本人は「今夜は大成功だ。みんなありがとう！」とツイッターに投稿したから、アレ

レ・・・？さらに、一夜明けた翌日昼間の記者会見では、「逆風を跳ね返した勝利！」と胸を張ったから更にアレレ・・・。

中間選挙の正確な分析とそこから導くべき今後の展望は今後の課題だが、私がすごいと思うのは、いつもトランプ発言の方がメディアの予測の先を突っ走っていることだ。現に、投票日の株価は乱高下したが、中間選挙後の11月8日の株価はべらぼうに高くなっている。もちろん私はトランプ政権の行方を楽観視しているわけではないが、少なくともオバマ前大統領のように理想ばかり語って何もできなかった姿よりはマシ。多くの人がハラの中ではそう思っているのでは・・・？

■□■ “モンスターは誰だ” ムーア監督に朝日がインタビュー ■□■

11月8日付新聞各紙はトップで中間選挙の結果を伝えるとともに、その分析記事をたくさん掲載した。各紙の社説の中で最も面白くなく、単調なトランプ批判に終始していたのが下記の朝日新聞の社説だ。私はこの中身の無さにゲンナリだが、タイミングよく「オピニオン」の欄で大きくマイケル・ムーア監督のインタビューを載せたのは、さすが朝日。もっとも、これは中間選挙の結果をある程度予測した上で、事前に共同通信、毎日新聞と合同で行ったインタビューだから、すべて予定通りのもの・・・？

そこでのムーア監督の主張は相変わらず過激だが、少しわかりにくい面もある。彼は「解決策は、民主党が上下両院を押さえ、古いタイプの民主党幹部が道を譲り、若い世代や女性が党内の主導権を握ることです。そうすれば変化を起こせるでしょう。民主党が上下両院をとれば、トランプ大統領の弾劾手続きを進めることができるでしょう。裁判にかけるのです。ただ、民主党は弱腰で、一部にはそこまでしたくないという議員もいます。支持者が圧力をかけなければなりません。ここでトランプ氏に歯止めをかけられなければ、我々は20年までもたない」と語っているが、私は今回民主党から大量に当選した若い女性やヒスパニック系のマイノリティたちには期待していない。むしろ、この“左傾化”ともいべき現象は民主党内の対立や分裂を招くリスクの方が大きいと考えている。

2020年の大統領選挙では、共和党にトランプの対立候補がいないのと同様、民主党にも対立候補はいない。ある日突然、彗星のように有力な若手候補が出現するかもしれないが、それは少なくとも今回の当選者たちではないだろう。本作の結論と同じようにこのインタビューでも、ムーア監督は「トランプ氏を早く引きずり降ろさないと、引き返せなくなる時が来る」と結んでいるが、その実現可能性は？そのための“ウルトラ C”はムーア監督自身が民主党の候補として大統領選挙に出馬し、トランプを打ち負かすことかもしれないが、その可能性は・・・？

■□■ 論点を広げすぎ！もっとトランプ問題での突っ込みを！ ■□■

ムーア監督が生まれたのはミシガン州のフリント。ミシガン州は2016年の大統領選

挙でラストベルト（錆び付いた工業地帯）と呼ばれて有名になった白人労働者中心の地域だ。彼らの票を徹底的に掘り起こすことによってトランプは人気を高めていったわけだが、それを骨身にしみて感じたムーア監督はトランプの抬頭の可能性にいち早く気づいたらしい。そのため、一部マスコミや民主党のエリート層等が「初の女性大統領の誕生確実！」と浮かれている姿に危機感を感じ取り、早くからトランプ大統領誕生の可能性を主張していたから、この男は日本のジャーナリスト木村太郎氏と同じようにすごい。

ムーア監督の『華氏911』における問題提起は鋭かったが、それに続く『シッコ』（07年）（『シネマ15』269頁）も『キャピタリズム〜マネーは踊る』（09年）（『シネマ24』93頁）もそれぞれ鋭いもので、私には興味深かった。したがって、今回の『華氏119』ではどこまでムーア監督独自の視点でトランプの実像（虚像）に迫れるかと期待していたが、少し物足りない面も。その理由は、論点を広げすぎたため。論点を広げすぎているのは①ミシガン州フリントの水道水汚染問題、②ウェストヴァージニア州の教員ストライキ、③フロリダ州パークランドの高校銃乱射事件の3つだ。

これらはそれぞれ興味深い事件や問題だが、ドナルド・トランプを大統領としてどう考えるのかという大きな論点とは異質のもの。①は共和党のリック・スナイダー州知事個人の資質の問題だし、②もヴァージニア州特有の事件。そしてまた、③の根本にある銃規制の在り方はトランプ大統領だけの問題ではなく、米国の歴史上の大問題だ。したがって、『華氏119』というタイトルの本作にこれらを入れ込んだのはムーア監督の作戦の失敗だと言わざるを得ない。こりゃ明らかに論点を広げすぎ！もっとトランプ問題での突っ込みを！というのが私の意見だ。

■トランプもダメ！ヒラリーもダメ！ならば俺が・・・？■

逆に本作で、トランプ批判と同じくらい面白かつ容赦なかったのが、ヒラリー・クリントンのエスタブリッシュぶりに対する批判やオバマ前大統領の無能ぶりに対する批判を含む民主党の体質そのものに対する批判。政治や選挙に巨額のカネが必要なのは日本も米国も同じだが、そうだからといって、いくらでも企業献金に頼ればいいというものではない。ところが、民主党の主流派になっていったヒラリー・クリントンの資金作りの戦略は？これでは民主党が次第に共和党に近づいたと批判されても仕方がないし、それに異を唱えたバーニー・サンダース候補が急速に若者たちの人気を得たのもわかる。もっとも、本作ではちょっとサンダース候補を持ち上げすぎているのが気がかりだが・・・。

さらに、民主党内ではヒラリーらの主流派に対抗するべく草の根運動を展開し、自ら立候補を決意した若い女性やムスリム系の女性も登場するが、本作でムーア監督はこれらをどのように評価し位置づけているの？他方、日本では小沢一郎たちの“反自民”の動きと一連の“政治改革”の流れの中で“小選挙区制”が実現したが、民主主義の老家たるアメリカで私もよくわからないのが大統領選挙における選挙人制度。なぜ、単純に一人一票に

よる直接選挙になっていないの？本作でムーア監督はそれについても容赦ない批判を加えているので、それにも注目！

このように、本作ではトランプはダメ！ばかりでなく、ヒラリーもダメ！オバマもダメ！そして、民主党もダメ！とムーア流の突撃は鋭いが、さてそれならどうすればいいの？彼はトランプをヒトラーと対比させながら、本件の結論として、「今必要なのは行動だ」と語り、若者たちを煽っている。そうすると、ひょっとして2020年の大統領選挙には、ムーア監督自身が出馬するかも……。いやいや、それはないだろう。

■投票日から数日を経て・・・■

ムーア監督自身の出馬は半分笑話で、現実問題としては99.9%ないはずだが、ひょっとしてヒラリー・クリントンの再出馬はあるの？ニュースによれば、ヒラリー自身は「大いにその気あり！」と伝えられているが、さすがに世間の目は賞味期限切れ・・・？面白かったのは、11月9日の『BS フジ LIVE プライムニュース』で木村太郎氏が本作を紹介して、ムーア監督自身の出馬の可能性に触れたこと。さらに、興味を引いたのは、11月13日に回顧録を出版するオバマ前大統領夫人のミシェル・オバマの出馬に触れたことだ。彼女は美人で頭がよく、オバマ前大統領以上の人気者だから、こりゃ出馬表明すればひょっとして・・・？

他方、日本では投票結果は翌日に確定するのが常識だが、アメリカでは接戦の場合、確定まで数日を要することが時々ある。前回2016年11月の大統領選挙もそうだった。今回も、フロリダ州の上院選挙と知事選挙の開票を巡っては、得票率の差が自動的に再集計が必要な0.5ポイント以内だったとして、再集計の作業に入っているそう。また、ジョージア州では米国初の黒人女性知事を目指す民主党候補が、黒人など民主党支持者が多い地域で「未集計の不在者投票が数万票ある」として連邦裁判所に提訴したと報じられている。ちなみに、2000年の大統領選挙ではフロリダ州の投票用紙の再集計をめぐる訴訟になり、民主党の副大統領だったゴア氏の陣営が敗北を受け入れ、共和党のブッシュ氏の勝利が決まるまで1か月以上かかっている。そんなドタバタ劇(?)も含めて、今回の中間選挙についてはしっかり勉強したい。

2018(平成30)年11月13日記